# memorable books

## 「はじめに」フリーペーパー？

「フリーペーパーの定義って何ですか？」フリーペーパーの「専門店」と大阪で旗をあげていると、メディアの取材とかで、まず一声に聞かれる事の多い言葉がこれだ。（＝正解を先に言うと、このフリーペーパーという言葉自体は「和製英語」なので厳密な定義は存在しません）

あるいは、それとは違い「フリー（無料）なのに（商業出版にも負けない）このクオリティ！凄いですね」と、デザインや紙質、テキスト量や写真のクオリティとかの「商業者と比較した尺度」でテレビの視聴者に「わかりやすく紹介してください」とする姿勢とも接してきました。

確かに限られた時間内で「わかりやすく魅力を伝える」のだとしたら「それはそれで」あながち間違いであるとも思いません。いや、むしろ正しい姿勢なのかもしれません。

でも。フリーペーパーをこよなく愛する1人の立場としてはその都度、正直「ちょっと待って欲しいな」とも内心思ってきました。

なぜなら、私個人は定義が前述の様に曖昧な「フリーペーパー」のフリーを「無料」ではなく「自由」と捉えて解釈しているから。だから、商業誌、いわばお金で交換できる本と比較する基準「そこではなく」むしろ、発行者のある種「声をあげたくてたまらない、誰かに伝えたくて仕方がない」その想いが伝わってくる冊子にこそ、強く惹きつけられているからです。

そんな私が、これから少し紹介する10の冊子は、極めて個人的な「独断と偏見で」選んだ「想いを感じる」フリーペーパー達です。「お役にたてるかわかりません」が、それでも「そんなことより」何かしらの想いを感じていただけたら心から嬉しく思います。

「えんを描く」”ともだちにお手紙を書く”一緒に。

兵庫県、尼崎市でライターを本職とされている母が文章、そして小学生の娘がイラストを担当する。そんな共同作業としてのこの冊子の事に興味を持ったのは、店舗を始める前、確か京都で開催されたフリーペーパーを発行している学生団体の集まりだっただろうか。登壇していた女子学生が「私はこの冊子が大好きです！」と笑顔で紹介していたのが記憶に残っている。

そして、それから少し時間が経って、私の記憶が接続するのは店舗がオープンしてから初のトークイベントのゲストとして迎えた母娘の、特に娘さんの快活な姿だ。看板とかに自由かつ素敵なイラストを楽しげに描いてくれたり、メンバーそれぞれに向けてわざわざプレゼントをもってきてくれたのを鮮明に覚えている。

毎回「冊子自体の折り方」から、母娘で色々相談しながら考えて決めているらしいのですが。それも含めて、この冊子の派手ではなくても「心のなかで抱きしめながら会話する」。そんな他者から見ても、はっと気づかされる優しいメッセージが多くの方に届けば良いな。そんな事を思いながら、今も僕は機会を見つけては、この冊子の事を店舗に訪れてくれた方に向けて、その魅力を出来るだけ伝えようとしています。

「大阪銭湯**MAP** 北区」”銭湯は日常のオアシスです”

最近はあまり姿を見せなくなってしまっているけれど、店舗から数分の距離に住んでいる（らしい）発行者の彼が「今までフリーペーパーを制作したことなどなかったけれど」と店舗にて、全国の様々なフリーペーパーを読む中で「刺激を受けて手探りで制作した」この冊子の存在は、やはり今でも何とはなしに眺めては、私たちの活動を今でも静かに勇気づけてくれています。

冊子としてはイラストを（確か記憶が定かであれば）「友人にお願いしつつ」しかし添えられた一言一言のメッセージは自分自身で、ビートルズを例に出し”あるミュージシャンがビートルズを聞いたことない人に対してこう言いました。「これからビートルズの新曲を213曲聴けるなんて、君はなんて幸せ者なんだ」と”大阪市内、北区にある銭湯の魅力を銭湯を訪れたことのない人に対して「日常のオアシス」として紹介しているのですが、そのシンプルなメッセージが逆に発行者である彼自身の誠実さを雄弁に伝えてくれている気がするのです。

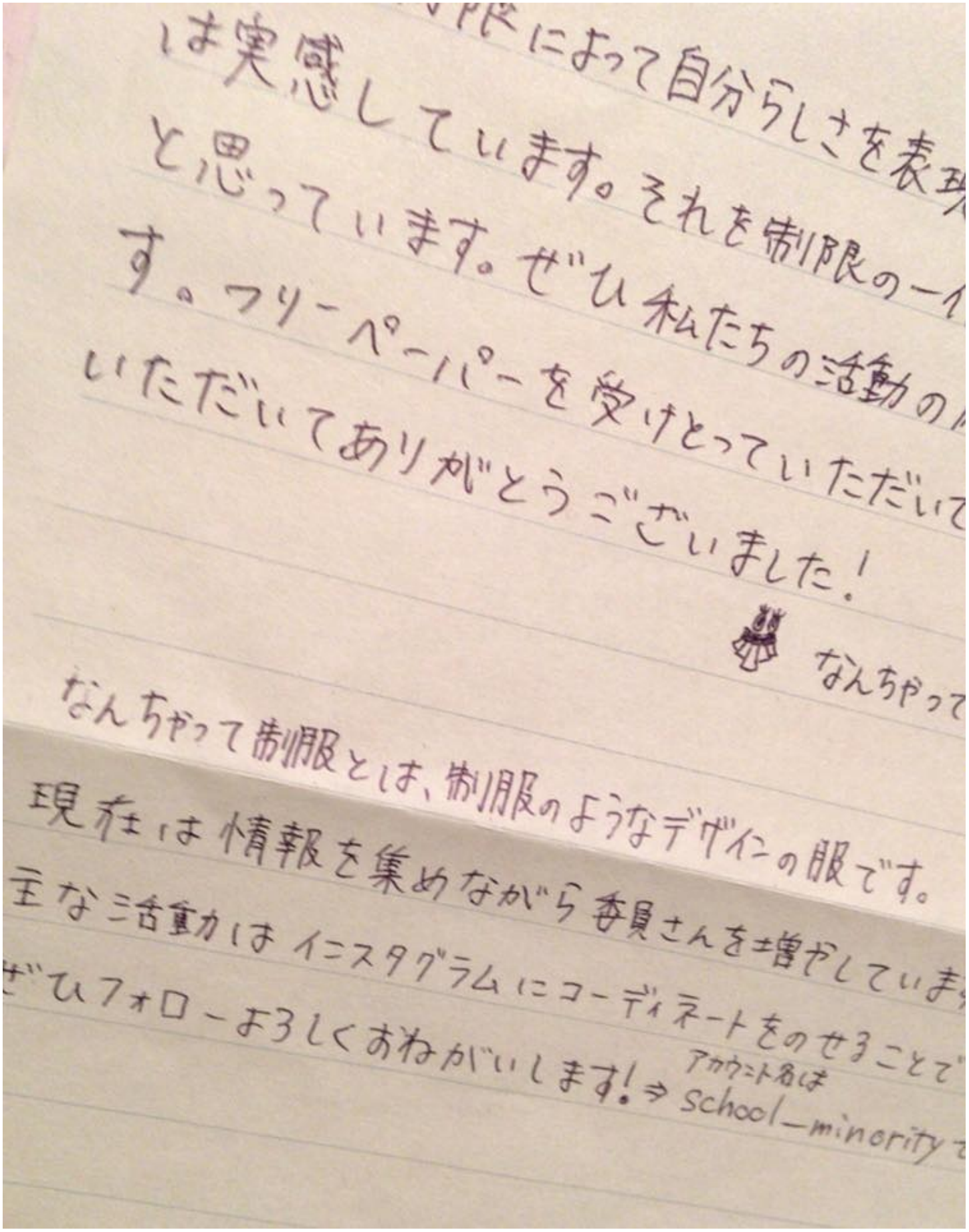
”おおーい。台風の予想だにしない被害で銭湯の廃業が加速する中、今こそ君の力がより求められてるぞ〜！”とか”最近、格闘家の角田信朗さんが来店した際に「趣味は銭湯巡りです」って言うから、君の冊子を紹介しといたぞ〜”とか。もしたまにあったら、また改めて顔を出してくれたら伝えるからな。

「なんちゃって制服委員会」”お金はないけどオシャレはしたい”

最初に存在を初めて知ったのは、確かTwitterのタイムラインを何とはなしに眺めていた時だと思う。

指定された制服を着る事で、記号化した存在とされ、自分らしさや青春を奪われる事への静かなる抵抗として”好きな制服を市販の服でコーディネートして「なんちゃって制服」としてinstagramに写真をアップする。”

その活動を「多くの人に知ってもらう」目的の為に福島の女子高生たちがお金のない中で制作したフリーペーパーであるこの冊子の存在を知った直後に、社会人としての時間の方が学生時代より既に長い私がどうしても感じてしまったのは自身と重ねわせた遠い昔の記憶としての「懐かしさ」。でも当事者達にとっては「大きく切実な活動である」事も同時に理解でき「何かしら応援したい」と素直に思ったのです。

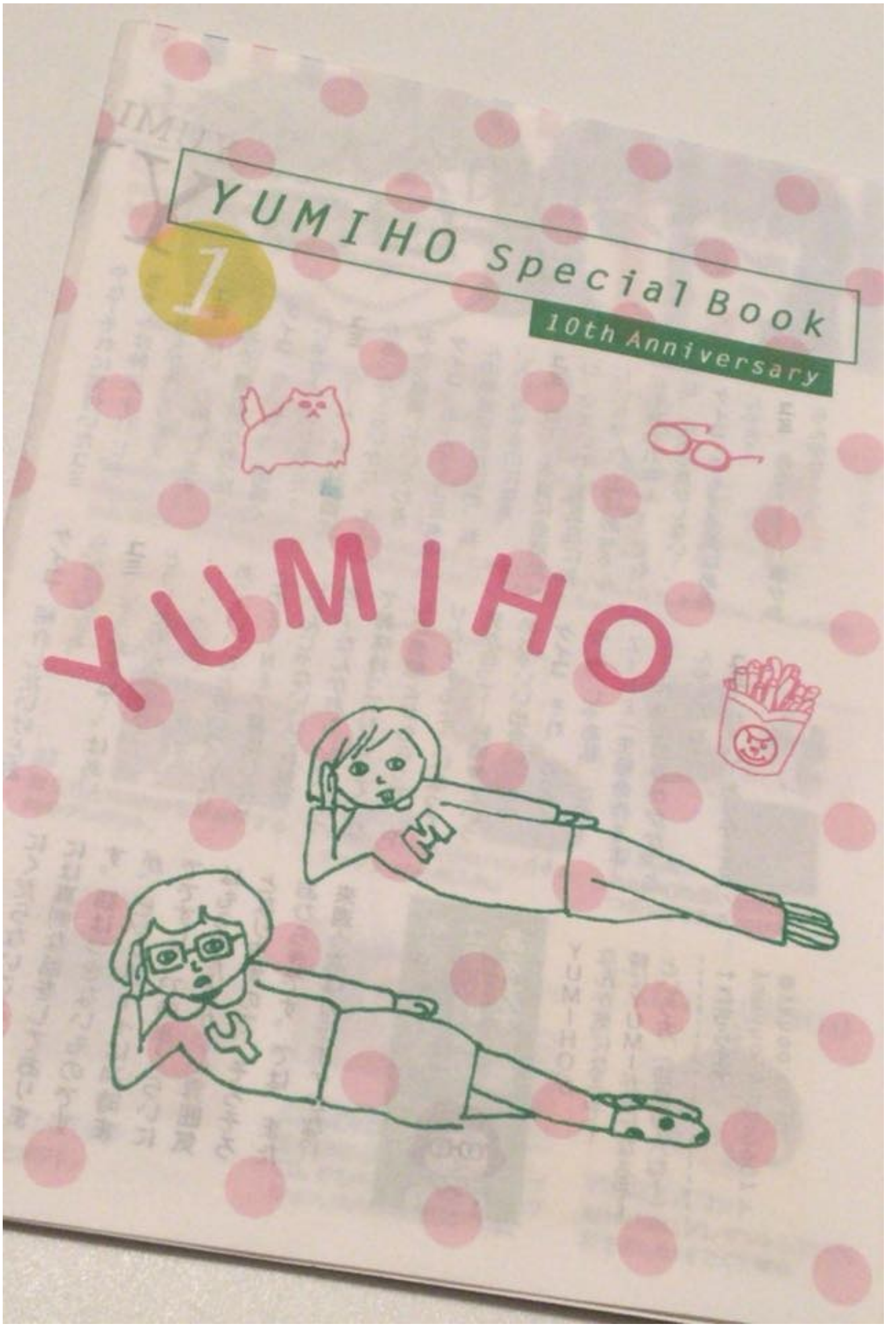



その気持ちは、コンタクトの末に本誌が店舗に送られてきた時に冊子と共に添えられた「直筆の手紙」で、確信に変わった気がしました。正直な話、冊子単体では「情報量が少なすぎて」単体だと何となく手にとった人だと、目的がよく伝わらないのではないか？とお節介にも思ってしまっていたのですが。その手紙には自分たちが「どれだけの想いでこのプロジェクトを始めたか」

その気持ちがキラキラと文章全面に溢れていたからです。

「うん。わかった。荒削りでも君らはどんどん進め。君たちの事は僕が僕なりに機会を見つけて、ちゃんと伝えてみせる」今も当事者たちには伝える事もせず、ただ店舗に「こっそり」あなた達からいただいた手紙をちゃんと展示しています。それが何かしら「コール&レスポンス」静かに自然にちゃんと繋がれば良いなと思うのです。

「**YUMIHO**」”前世の双子と出会って**11**年記念”



送られてきた時に？？？と強烈な印象を受けたのは”YUMIHOとは・・ユミとミホが結成したユニットである。2人はくだらないことが好きで「前世は双子である」”という謎の冊子説明文でした。

「え？前世が双子？？何それ？」思わず２度見してしまった位に。

でも。誌面を広げると、四国の短大入学時に2人が出会ってから11年、そしてユニットYUMIHOを結成してからの10年の「自分たち2人だけの年表」ファミレスでの相互インタビュー、それを記念して実現する夢として、この冊子を出したとの事を知り。また”どんだけ自分たちが好きなんだ！なんて思われた方もいたのかもしれません。しかし、皆様にYUMIHOのことを知っていただきたかったのです！”なんて書かれていると、素直に仲良しな2人に凄いな！って思わず拍手を送りたくなったり。

”特に活動もしていない私たちですが（中略）せっかくなので記念に残しておこうと思ったのがこのZINEです”

うん。良いと思います！拍手です！

「**KODAMARI**」"好奇心溢れる方々の心くすぐる**1**冊を"

いつも最新号ができる度に、店舗までふらりと持参してくれるフットワークの軽い発行者さんは、なんと言うか「自分が興味のある物を毎号テーマに。と言う事で、これまで「靴紐」や「クリームソーダ」「Tシャツ」などなど、興味をもってしまった、出会ってしまった事をとにかくデザイン、テキスト、モデルの手配、撮影等々、「全部自分1人で形にしたくてたまらない」のだろうな。そんな「まっすぐなクリエイティビティ」が毎回伝わってきて嬉しく思うのです。

もちろん。毎回グループやチームで「編集方針や構成」などを顔突き合わせて、楽しみながら（時には衝突して）擦り合わせて制作していく。そんな冊子も「共同作業の結果」としての冊子として魅力はあるのですが。それとも違う「自分としての主語」を強く感じさせるので。

それは自身の冊子だけでなく、他の媒体へのゲスト寄稿や、フリーペーパーに限らず繰り広げられる様々な活動からもビシビシと感じています。 これからも「我が道を行って欲しい」勝手ながら応援しております。

# 「tovo plus」”あおもりの100家族、わたしたちのこれから。”

青森県に住む「家族」の写真とインタビューで、東日本大震災当時の「家族」の様子、それからの変化を「100ヶ月間にわたりフリーペーパーとして伝える続けている」この冊子は、特に毎回ドラマチックなエピソードが掲載されている訳ではないのだけれど。まず、よく考えて欲しい。普通の家族にとっては「むしろそれが当然」で、ちゃんとした日常を取り戻したからこその「確かな言葉」がより強く、嬉しく感じるのです。

また、このプロジェクトが素晴らしい所は「100ヶ月間にわたり」と発行者側が事前に決めている所。毎月1冊出すとしても「約8年間！」ですよ！。個人的な意見ですが、東日本大震災当時は沢山あった震災チャリテーイベントや様々なプロジェクトが”熱狂しやすく忘れやすい”この国において、なんとなく形骸化、単なる「お祭り」化していっているようにも最近感じる中で、決して派手ではなくても「身の丈にあった形で継続されている」またその覚悟は本当に素晴らしいと思うのです。

「ゆうこ新聞」”病気や障害と共に生きる人へ”

# 心に残る入院ごはん

病室のメニューにも、物語がある。

ゆうこ新聞

無料

あるある!?「おかゆにクリームシチュー」「麺の日はうれしい」「謎の魚が…」

長い時は2か月位、絶食なので、入院食は”あこがれ”だった。
東京都・男性・潰瘍性大腸炎

麺の日は、テンションがあがる。
福岡県・女性・MCTD・成人スティル病

おかゆにクリームシチュー という、謎のマリアージュ。ふりかけがあって助かった。
男性・血友病・HIVポジティブ

入院中の献立が、退院してからも役立っている。
広島県・女性・他、間質性肺炎

病院食が結構好きな人間なので、いつも完食してました(苦笑)
?県女性・SLE・間質性肺炎・他

日と空けず出る、ナムル。病室では ムル攻撃。と、呼ばれていた。
神奈川県・女性・関節リウマチ

「ほんもの?と見せて」
北里大学病院
神奈川県相模原市

人気メニューのひとつ「ペンネ」の他に、季節の食材を使ったかやく ご飯の日や、中華の日、お正月や クリスマスなどの行事メニューも 豊富。詳細は第3ページ

るウィルスに感染していること。原因はさまざま。1980年代に、血友病

面識こそないのですが、以前「全身性エリテマトーデス」という難病に発行者自身が、かかって入院したときに病気の辛さを分かち合える仲間と出会ったことをきっかけに退院後「同じように病気に悩む人を応援したい」として始まった（らしい）手作り新聞「ゆうこ新聞」は、毎回届く都度、色々と私に思い出させてくれる。

一つは、数年前に末期のガンで亡くなった父親を見舞いに、何度も見舞いに病院を訪れた際に感じていた「殺風景な病院の印象だ」まがりなりにも文化的な活動に関わっている立場があるからこそ、こんな所にいては「かえって生きる力が奪われるのでは？」と現場の親切な担当医療スタッフの姿とは別に「空間としての病院」のあまりに寂しい環境にびっくりしたこと。

そしてもう一つは、そんな環境では「どうしても受け身にならざるを得ない」不安な立場である患者は「自分の本音や言いたい事をどうすれば発散出来るのだろうか？」そんな不安や心配も同時に感じていたのですが。

この冊子の存在は特に後者「病気に苦しむ人やその家族など当事者たちに役立つ情報」を「食事制限の中でもおいしいレシピ」「災害時に備える薬の予備について」などと毎回、切実にテーマを決めて、実際に専門書を調べたり、医療関係者に取材したりして「明るいイラスト付き文章で」形にしているのが（しかも全国発信）本当に素晴らしいな。と心から思ったのです。

おそらく潜在的な方を含め、これからも沢山の方に求められていく冊子ではないかと思うので、じっくり無理をせず続けていただけたらなあ。と思っています。

精神病クリエイター生存の記録！
ゾンビ
vol.23
道Dab場
4コマ大特集
僕らが死に出ない理由
死出の
特報
まんがが出版されます!!

昨年11月に合同出版より「実録 解離性障害のちぐはぐな日々：私の中のたくさんのワタシ」も初商業出版した発行者が自身の抱える「解離性障害」「双極性障害」の病状把握と承認欲求の充足、不安等の解消を目的に発行しているこの冊子は「当事者による症状や混乱」といった決して軽いとは言えない内容ではあるのですが「漫画という表現形式」をとってくれていることで。当事者外の人にとってもより理解を深める機会を与えてくれています。

また「下を向いて歩こう」「僕らが（死出の）旅に出ない理由」など、言葉単体で切り離して見るとギョっとするような自虐的な言葉も時に出てきますが。漫画のところどころに登場する「カウンセラーや友人たち」とのやりとりなど拝見するに「それでも」と受け止めつつも日々「世の中は面白い」と過ごされている様子にどこか安堵とほっこりした元気をもらえるのです。

「**OSAKA**」”初めまして、またいつか”

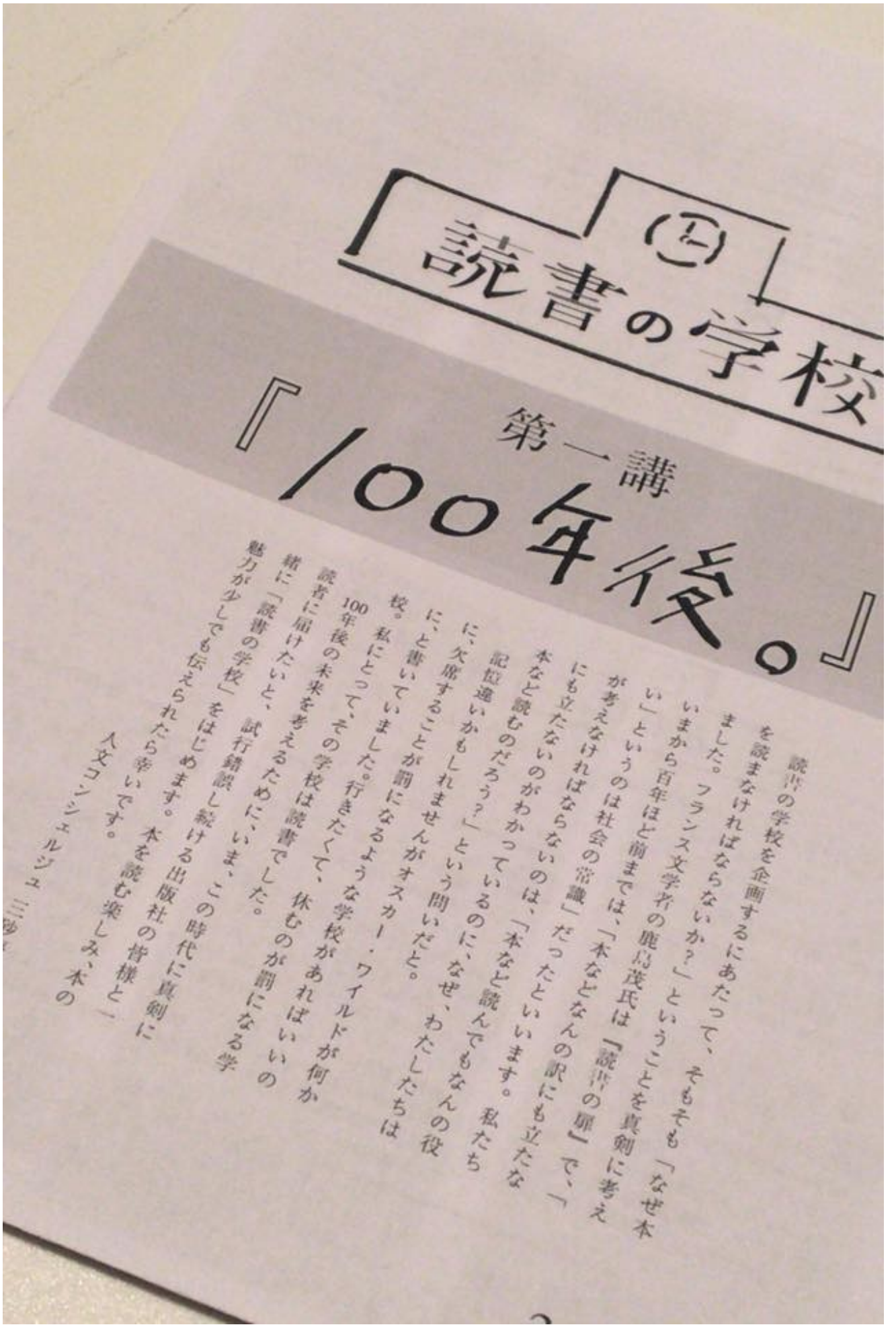
ここ数年は縁があって、台湾のZINE発行者の方々と交流する機会があるのですが、その内の1人である（アーティスト名）オレンジさんが数日間の大阪出展と合間の観光の感想や記録を「そのわずか期間中に描いて、コンビニで印刷し手渡してくれた」のがこの冊子となるわけなのですが。

この冊子が強く印象的だったのは、それが「実現出来るか出来ないか？」の難易度自体は本人にとってもだろうし、私自身にとっても別に技術的には対したことはないのだけど。それより何より、どこかワークショップなどを担当する中で”完成度とか気にせず自由でいいですよ”と発言している癖に、実際に初対面の誰かと冊子交換とかをする機会があった時には「ちゃんと完成したものを後日」とか考えがちな私に対する「不意打ち」と言うか、予想外の嬉しい驚きをもってくれて新鮮だったのです。

”そうそう、フリーペーパーって本来、その位気軽なもので良いんだ”

世界中を転々と活動されているので、今度いつ出会えるかわかりませんが。オレンジさん。ありがとう。

「読書の学校」”なぜ本を読まなければならないか？”



# 【読書の学校】

## 第一講

## 『100年後。』

読書の学校を企画するにあたって、そもそも「なぜ本を読まなければならないか？」ということを真剣に考えました。フランス文学者の鹿島茂氏は『読書の犀』で、「いまから百年ほど前までは、「本などなんの役にも立たない」というのは社会の常識」だったといいます。私たちが考えなければならないのは、「本など読むのがわかっているのに、なぜ、わたしたちは本など読むものだろう？」という問いだと。

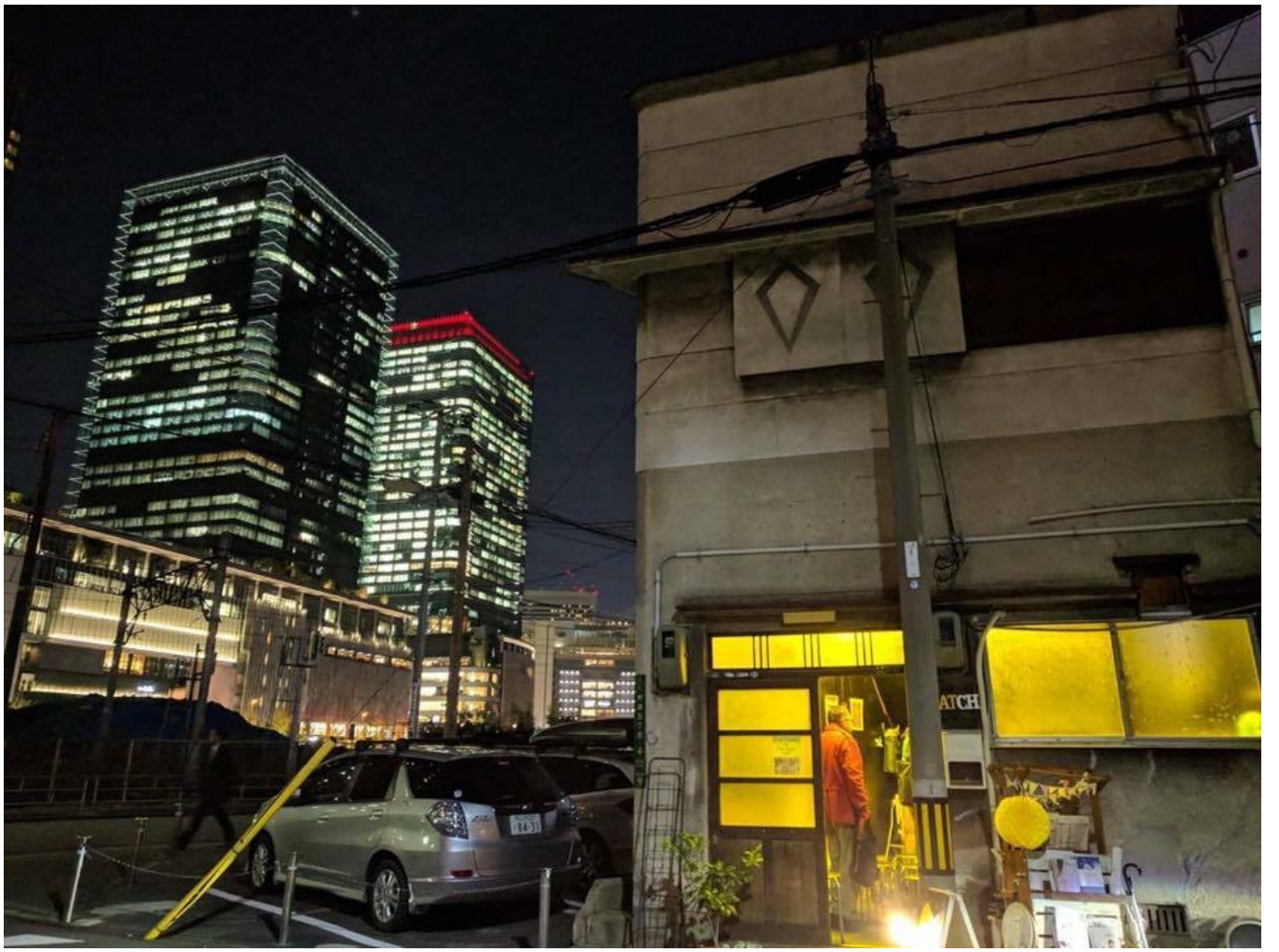
記憶違いかもしれませんがオスカー・ワイルドが何かに、欠席することが罰になるような学校があればいいの校。私にとって、その学校は読書でした。

100年後の未来を考えるために、いま、この時代に真剣に読者に届けたいと、試行錯誤し続ける出版社の皆様と一緒に「読書の学校」をはじめます。本を読む楽しみ、本の魅力が少しでも伝えられたら幸いです。

人文コンシェルジュ　三砂

毎回テーマを「100年後」「日々是好日」「なぜ、つながらずにいられないのか？」などと決めて、梅田蔦屋書店のコンシェルジェ及び東西の出版社11社が一緒になって「読書の学校」として、テーマに沿う様々な「これは！」という本をオススメしているこの冊子は「大阪、梅田蔦屋書店の店頭限定でのみ」発刊されているので、大阪及び関西の方はぜひチェックして欲しい。

どちらかと言えば「個人が発刊している冊子」を中心に紹介してきた中で、最後に何故この「大手書店×出版社」が作っているこの冊子を紹介するかと言えば、1つはフリーペーパーの設置場所に詳しくない方からすれば、フリーペーパーと言えばタワーレコードとかが有名かもしれないけれど。「ここにも面白い冊子がありますよ！」と誰かに伝えたい気持ちと。確かにこの冊子は言わば業界の方達が発刊しているかもしれないけれど。だからと言っても、「本を読む楽しさを伝えようと」と書店と出版社の方々が「新たな視点で埋もれそうな書籍に光をあてている」その想いの真摯さは、やはり素晴らしいと毎回感じているのです。




いかがだったでしょうか？

もちろん、まだまだ「紹介したい」あるいは「紹介すべき」と思う冊子は沢山あるのだけれど、今回の紹介を通じてフリーペーパーの「フリー（無料）」ではない「フリー（自由）」な魅力が発行者それぞれの「想い」と共に少しでも誰かに伝わっていれば幸いです。

また、私自身「フリーペーパー専門店」を3年間運営し、日々様々な媒体に目を通し、紹介に努めてきましたが「あの冊子もオススメです」あるいは「私の冊子も紹介してください」そんな方とかがおられましたら、ぜひ気軽にWEBサイトからご連絡いただけるか、何かのついでに来店していただけると嬉しく思います。
https://hatch2015.jimdo.com/

最後に、全国の様々なフリーペーパーと私が「向き合うようになっての変化」として起きている自らの変化を紹介させていただくと、１つは「気づけばスマホをもって検索して」眺めては「知ったふりをしてきた」私にとって、フリーペーパーはまるで「郵便配達の誤配」でもあるかの様に、まず「自分からは認識できていない暗黙知の気づき」を「立ち止まって与えてくれている」事が挙げられます。これがまず機会として本当に届くたびに楽しい。

そしてもう一つは、日常、街中で書かれている様々な「紙媒体を眺める眼差しが変化した」事。これまでは置かれていても「どうせチラシだろう」と認識すらしなかったもの全てに、まるで映画「ベルリン・天使の詩」の後半で白黒だった世界がいきなり「鮮明な色に溢れた様な感覚」で、あらためて宝石が溢れているかの様に捉え直す様になったことだ。

後者は少し共有しづらいかもしれないけれど（笑）いずれにしても、ここまで読んでくれた人にとって「フリーペーパーを手にする」事がまた「新たな世界を覗く扉」となって、退屈な日常が「冒険の日々」になる事を切に願っています。

# 想いを感じるフリーペーパー10選

http://p.booklog.jp/book/125133

著者 : 田中冬一郎
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/waon0317/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/125133

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト